

Latvija

Dievs svētī Latviju,
Latvija,
Dievs svētī Latviju,
Latvija

日本ラトビア音楽協会ニュース

第1号
(2004年12月10日発行)

日本ラトビア音楽協会事務局
〒229-0014 神奈川県相模原市若松1-14-10 遠藤税理士事務所内
Tel 042-745-3334 Fax 042-740-4725
E-mail 0424668801@jcom.home.ne.jp

発行代表者 加藤晴生
〒277-0823 千葉県柏市布施新町2-18-9 Fax 04-7132-5423
E-mail katohr@earth.ocn.ne.jp

編集代表者 徳田浩
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-31-6-504 柔道新聞編集室
Tel・Fax 03-3203-0363
E-mail htoku@pastel.ocn.ne.jp

日本ラトビア音楽協会の会長をお引き受けして

2004年9月25日

会長 熊谷直博



ベルリンの壁が崩壊してソ連体制が崩壊し始めたのは1989年。バルト三国で「人間の鎖」と言う歴史的出来事があったのがその年の11月です。ソ連の桎梏からバルト三国が開放される時代の流れが始まっています。1990年のリトアニアの独立に2年遅れて、1991年8月にはエストニア、ラトビアが相次いで独立を宣言しました。同年9月にはソ連が3国の独立を承認し、さらに3国の国連加盟が認められました。私が熱帯のナイロビから極寒のスウェーデンに転勤し、ラトビア大使を兼任する事となったのは、こんな時代の真っ只中の1991年11月の事でした。スウェーデン国王に御信任状の捧呈を済ませ

せると直ぐ、ノーベル賞創設90周年の記念式典に遭遇しました。生存している全てのノーベル賞受賞者が世界中から参列しました(日本からは、福井謙一、江崎玲於奈、利根川進の3氏がご夫妻で参列)。国を挙げてのお祝いでした。新任の日本大使の出番もあり、夫妻で祝賀舞踏会などに参加しました。スウェーデンでこんなお祭り騒ぎの雰囲気があった頃、海の向こうのラトビアでは、国の建て直しも去る事ながら、残留旧ソ連軍の撤退要求問題を始め、産みの苦しみの真っ最中でありました。首都リーガでの独立記念祝賀式典が催されたのは翌1992年の春で、雪解け間もない頃の事でした。天皇陛下の

御信任状をウルマニス初代ラトビア大統領に対して提出し、初代日本大使としてこれに参列しました。

私のラトビアとの繋がりは、大使在任中に何度かリーガでの行事に参列のため訪れ、独立のための努力を観察する事が主であり、大使として主たる任地だったスウェーデンで「日瑞議員連盟」を創設するなど、そちらの方により多くの精力を注いでいたように思います。2年半のスウェーデン在勤の終わり頃(1994年春)、東京の迎賓館長が倒れられ、その後任として私に白羽の矢が立ちました。急遽帰国、迎賓館長になった次第です。迎賓館長時代の4年間、世界各国から日本を訪れる国賓・公賓の接遇に忙しく立ち回りながら時間が経過しラトビアの事を半ば忘れていたある日、早稲田大学グリークラブOBの「稲門グリークラブ」の加藤さんから、「ラトビアの女声合唱団ジントルスの東京公演を迎える名誉会長になって呉れないか」とのお誘いがあったのです。私は大学時代と

外務省時代に合唱グループに所属していた合唱には関わりがあった事もあり「良いですよ」と言ってお引き受けしたのです。その2年後、今度は「稲門グリークラブがラトビアの合唱祭に参加するので名誉団長を引き受けて呉れないか」と、同じ加藤さんのお話がありこれもお引き受けしたのです。70人の団員の方達と一緒にウィーン、リーガでの合唱に私自身も参加させて頂き、本当に楽しい旅行をさせて頂いたのです。それが今回、私が、「合唱の力でソ連からの独立を成し遂げたと、言わば合唱の国ラトビアとの関わり合いを持てる事を無上の光栄に思います」と言う事で日本ラトビア音楽協会の会長をお引き受けする事となった発端と経緯のあらましです。

さて、お引き受けする事となった以上、できる事があれば何でもしたいとの気持ちです。何かできるか判りませんが何でも致しますので、宜しくお引き回し下さい。

協会設立の経緯と果てしなく広がる夢

専務理事 加藤晴生



永年の夢でもありました日本・ラトビア音楽協会が、発起人の方々や新しく会員になられた皆様のご理解とご協力により、9月17日無事にスタートいたしました。みなさまのお力添えに心より感謝いたします。

今後ともこのプロジェクトを成功させるよう尽力する所存ですので、あらためて当協会発展のためにより多くご支援をお願いいたします。

私のはじめてラトビアを訪れたのは92年です。そして93年4月にリーガで演奏会を開きました。以後私の属している稲門グリークラブや早稲田グリーの同国との交流を通じ、このバルトの小国がすばらしい合唱大国であり、またクラシックの分野でも興味ある歴史をもち世界的に著名な音楽家を数多く輩出していること

も知りました。ポップスについても然りです。

一方、我が日本の音楽界も隆盛を極め、国内のみならず海外でも多くのアーティストが大活躍中です。クラシック関連の演奏会は年に一万回におよびます。合唱音楽も戦後著しい発展を遂げ、新しい優れた作品が次々と発表され、今や日本を代表する一つの文化を形成するにいたっています。

こうした背景のもとに、96年来日したアマチュア女声合唱団「ジントルス」の衝撃的な演奏がきっかけになって、合唱交流協会をつくらうとの話がもちあがりました。あれからほぼ10年、話はあっても実現までの道はほど遠いものでした。

今回設立を決意したのは、このプ

ロジェクトの実現を望んでおられた辻正行氏や後藤田純生氏が相次いで亡くなられたこともひとつの理由です。いつまでも先延ばししているとこれまでの努力が無に帰してしまう。とにかく形だけでも作らうとの声にもおされました。約60名の方に発起人引受けの依頼状を出しました。断わった方は数人でした。協会を発足できると判断しました。この結論が出たのが8月になってからでしたので今も何かとドタバタしています。

協会の名称を日本・ラトビア音楽協会としました。合唱交流協会などの案もありましたが、国際交流を目的としていますから活動にフレキシビリティをもたせるには特定分野の音楽に限る必要はない。さらにこの協会が将来、日本とラトヴィア間の音楽情報の起点にしたいとの考えが主な理由です。

当協会では会員相互の絆を強めつつ音楽を通じて日・ラ間の相互理解を深めることに出来ることを出来るだけ多く取り上げたいと思います。ただし、その運営は一方的な片側通行にならないよう配慮しなければなら

ないでしょう。

出来立ての協会ですのでまだ手探りですが、ラトヴィアの演奏家・合唱団の招聘、指揮者の派遣、会員による講演会の開催などを検討していきます。

いま当協会にとっての重要なテーマは広報です。当協会の発展は会員の増加にかかっていますが、とりあえず来年3月までに100名にしたいと強く願っています。皆様のお知り合いなどで当協会にご関心をお持ちの方がおられましたら是非入会を勧めてください。

未だ来日したことのない世界のプリマドンナ、イネセ・ガランテさんなど有力演奏家もお呼び出来るような協会になればすばらしいと思います。夢は果てしなく広がります。

◇

熊谷会長とご相談の上、2月5日に第1回総会を開催することにいたしました。今後の事業展開について、会員の皆様から建設的な意見をいただき、楽しい懇親の時を持ちたいと願っています。多数ご参集いただきますようお願い申し上げます。

発起人会報告

北海道・九州からも参加、和やかに夢語り合う

日本ラトビア音楽協会発起人会が2004年9月17日に東京内幸町の日本記者クラブで開かれ、北は北海道から南は九州までラトビアに思いを抱く約40名が出席した。冒頭に加藤晴生発起人代表が設立趣旨・経緯・抱負を述べ、この日を協会の正式発足日とする提案を満場一致で決めた。続いて熊谷直博会長以下の役員人事が提案通り承認された(6面に掲載)。

熊谷会長の挨拶・乾杯で談笑に移り、出席者全員が次々に自己紹介して、抱負や、協会に寄せる期待などを和気あいあいに話し合った。

主なスピーチ要旨

(熊谷会長、加藤専務理事は別掲)

藤井 威氏 (副会長)

私は1997年にスウェーデン大使に就任し、独立に向かって走り出していたラトヴィアには14回訪問し延べ40日滞在した。



稲グリが初めて演奏会を開いた時に在任していたが、多くの人から賞賛の言葉を聞いた。

最も驚いたことは音楽の凄さで、地方の小さい都市にも素晴らしいオペラ・合唱・オーケストラがあった。

エストニアと共に、ラトヴィア人は人類史上初めて音楽で独立した国



であることを誇りにしている。

今後とも大いにお役に立ちたい願っている。

岡村 喬生氏 (副会長)

ラトヴィアがソ連に反抗した時、民衆は見事なハーモニーを響かせた。



音楽によるコミュニケーションは言葉と比較にならないほど強力だ。

折角いい事をやるのだから仲間だけの会にせず、幅広く多く人が参加することが望ましい。

もう一つ、相手の音楽を入れるだけではなく、日本からもどんどん持っていく努力をすべきだ。

私が関係している日・イタリア、日・ドイツ、日・オーストリア各協会などは入ってくるだけに終わっている。文化の一方通行ではなく、日本の素晴らしいものを海外に知らせることが必要。

私はいま、日本の文化・風土を正しく伝える蝶々夫人の演奏、普及に

努めている。ブッチーニが悪い訳ではないが、100年間間違ったままで演奏され誤解され続けた。

山本 德行氏 (九州在住・ラトビア支援の会)

8年前にラトビアを知り魅せられた。

スウェーデン大使から“日本の文化を紹介して欲しい”と依頼され、田舎の小学校にまで足を伸ばしたが、素晴らしい歌声で歓迎された。人の気持ちを表すのに音楽が一番と感じた。それから毎年のようにボランティアで行くようになった。

チャリティコンサートの収益で、日本語弁論大会の優勝者を日本に招いたり、留学生の面倒を見ている。一日も早く、ラトビア大使館が連絡事務所が設置されるようこの会でも努力して欲しい。

私は今年古希を迎えたが、これからはますます“こき(!)使われる”つもりでいる。

皆さんと一緒に、ラトヴィアへホームスティしながら旅行したい。

飛弾野一重氏

(北海道東川ラトビア交流協会)

台風18号で西原(義弘)会長が顔にケガをして急に来れなくなったので代理できた。

私たちはラトヴィアにある日本語学校に、ボランティアで教材を送っ

たのが活動の始まり。ささやかな活動だがCDを作ったり、日本語の写真集を作ったりして、ラトヴィアの素晴らしさを日本に伝える努力を続けている。



東京に、本格的な交流協会ができて本当に嬉しい。

西脇久夫氏 (理事)

(ポニージャックス)

1970年代のまだソ連時代に、10日間リガで毎日演奏会を開き、連日6千人、延べ6万人の人が熱心に聞いてくれた。我々はロシア語しか使えなかったが深い交流ができた。20年たった今も交流が続いている。



素晴らしい合唱団がいっぱいある。この協会がいろいろな合唱団をどんどん日本に呼んであげたい。

「100万本のバラ」は元々「娘に幸せをあげ忘れた」という意味の歌、加藤登紀子さんが日本に広げたが、他にもいい歌がいっぱいある。

中国には合唱団がないが、北京五輪までに3000人のコーラスを作りたいと我々に要望され、第一段として11月に日本から200人の合唱団を連れていく。

会員短信

風呂本佳苗ピアノリサイタル

2005『浪漫機構』

ロンドンに住み、新年毎に日本の皆様にお目にかかる機会を作っております。

1月8日(土)

[名古屋] 千種文化小劇場

1月9日(日)

[大阪] ザ・フェニックスホール

1月10日(月・祝)

[東京] ルーテル市谷センター

開演 14時

前売2500円 当日3000円

連絡先 ソシエテ・ド・ピティ・プラン 電話とファクス 0798-53-3465

※04年1月は頭文字Bの作曲家を集めた「Bの饗宴」が、「音楽の友3月号」で「古典から現代への繋がりを示す内容」「透明感と潤いを融合させた音色」「確かな技巧と曲への想いが巧みに融合した演奏」と評価をいた

だきました。

風呂本武敏・淳子(兵庫県西宮市)

ラトヴィア支援の会

チャリティ・コンサート

「井島正雄&カルテット

×マス・ジャズ・コンサート」

12月18日(土)

[北九州] 旧大阪商船・海峡ロマンホール

連絡先 宮原 電話093-322-1123

ファクス093-322-2525

※コンサートの収益はラトヴィアで日本語教育をしている学校への教材費、日本語弁論大会優勝者の日本招聘をサポートする基金にしています。今年の優勝者イリーナ(ラトビア大日本語学科3年女子)が6月25日から50日間来日し大きな成果を収めました。又ラトビアから来日している留学生(早稲田大など5名)のサポートも行っています。

山本德行(ラトビア支援の会・福岡県北九州市)

東京レディース・シンガーズ

(プロの女声合唱団)

「Xmasコンサート2004」

指揮 前田二生

12月20日(月) 紀尾井ホール

開演 19時

S 4000円 A 3000円

会員特典 S・Aとも1000円割引

連絡先 柴田 電話03-3446-1223

ファクス03-3446-2765

柴田幸子(前田事務所)

「小松原な」の演奏会

12月14・21日(火) 六本木ピアノラウンジ「GALAXY」演奏20時15分 男性10000円、女性5000円(フリードリンク)
12月20日(月) 京王プラザホテル・パーティ 演奏20時 10000円

05年1月24~31日「札幌・銀巴里」出演

小松原な(東京港区)

電話とファクス03-3409-8556

ルーツィヤ・カルータのCD

「主よ、あなたの大地は燃えている!」東京・キリスト品川協会におけるライブ録音)

定価2500円(送料300円別途)

※カルータ(1902-1977)はラトビアを代表する女性作曲家。このカンタータはテノール独唱、バリトン独唱、混声合唱、オルガンのための作品で03年、大勢の方たちの協力で東京演奏会が実現し好評を博した。日本では初のカルータ作品CD。
※05年9月23日に現代ラトビア音楽のコンサートを開きます。

菊地康則(日本カルータ協会・東京板橋区) 携帯電話090-6018-8558

ラトビア情報

ラトビアを代表する合唱指揮者

A・デルケーヴィチャ女史75歳
記念コンサート

世界的な名声を得ているラトビアのアマチュア女声合唱団“ジントルス”を40年以上指導し続けるなど、同国を代表する合唱指導者であるアウスマ・デルケーヴィチャ女史が今年7月に75歳の誕生日を迎え、10月9日にリーガのラトヴィア人協会大ホールで記念コンサートが開かれた。現地の新聞は「立錫の余地もない多くの聴衆が詰めかけた感動的なコンサートだった」と報じ、同女史の音楽の世界、人生、人間性を大々的に特集した。

演奏会終了後もジントルスの新メンバー100余名が集ってパーティーが開かれ、久しぶりに同女史の指揮で素晴らしいハーモニーが鳴り響いたという。

◇

アウスマ・デルケーヴィチャ女史は夫のツェピータ氏と名コンビで永年国立アカデミー合唱団（プロ）を指導し、世界最高峰の合唱団に育て



上げた。1959年から夫妻でジントルスの指導に当たったが、途中からアウスマさんがジントルスを、ツェピータ氏が国立を指導するようになった。同女史は、ラトビアが国を挙げて5年に1回開催する合唱の祭典で中心的役割を担い続けた。合唱祭の最後に歌われる「風よそよげ」は、名誉指揮者が順番に指揮する。03年の祭典も最後に登場したのはデルケーヴィチャ女史だった。アウスマは

◇

遠く離れた両国の音楽に共通するものがある気がします…。

「その通りです。一つは自然に対する大きな理解が前提になったメンタリティ。それから日本の俳句に現れる心、内容、世界観と同じものをラトビア人も持っています。両国の伝統的な民謡にも、共通の心が数多く見られます。ラトビアは旧ソ連に支配された時代からまだまだ経済的に回復していませんが、日本はずで

“夜明け”という意味、デルケーヴィチャ女史は文字通り新生ラトヴィアの黎明期から今日まで常に合唱界の主役を務め続けた。国家の最高の栄誉である「三ツ星勲章」を与えられている。

03年の合唱祭では1週間前の舞台

練習で電線に足を取られ、肩を骨折して入院したが、当日はそんな気配を全く感じさせなかった。

デルケーヴィチャ女史は世界各地でも演奏し、その都度絶賛を博した。日本にも96年にジントルスを率いて来日し聴衆に多くの感動を与えた。

無類の親日家
E・カッタイ氏に名誉博士号

リーガを訪れた日本人なら一度は面識があるはずのエドガルス・カッタイ氏が10月12日、ラトビア共和国科学アカデミーから名誉博士号を授与された。（写真左）

日本人以上に正確な日本語を話す、同国きっての日本通でもある。漢字をふんだんに使った同氏の日本語はともラトビア在住の人とは思えない。ラトビア大学で日本語教師を40余年続けたことや、日本文学作品を数多く翻訳した功績が認められ、01年に勲三等瑞宝章を受章した。

カッタイ氏は中国・内蒙古自治区生まれ。満州国ハルピンの北満学院



商科卒、満州国政府語学検定日本語特等級に合格した。終戦後はハルビン工業大学ロシア語・中国語講師、同校長の通訳を経て55年ラトビアに戻り、同科学アカデミー図書館外語部設立に関与して長年勤務した。

編集子は1998年の合唱祭に参加するためにリーガを訪問し、デルケーヴィチャ女史が2万人の大合唱を指揮して喝采を浴びる姿や、国立オペラ座の演奏で颯爽とカーテンコールに応える姿も見た。国を挙げての音楽祭で最も忙しなこの音楽家にインタビューを申し込み、カッタイ氏の通訳で実現して40分以上懇談することができた。その時の一節…。インタビューを終えて交わした握手は、暖かさや優しさに溢れていた。

に21世紀を先取りした素晴らしい国だと理解しています。日本語を勉強するラトビア人も多くなりました。私たちの国内事情がよくなるまで、これから10年から15年は必要だと思いますが、両国が音楽を通じて一層交流が深まるよう願っています」。

◇

翌日深夜の野外パーティーに招かれた。「ラトビア人はこの1週間は殆ど眠りません。コンサートなどに参加するスケジュールの他に、地方

在住の友達を自宅や学校に泊まらせてもらって、夜を徹して飲んだり話したりします。今日は歴史的由緒のある野外の民族博物館に、伝統の夏至の祭りと同じスタイルでお招きしました…。白夜を彩る至福の時は、今も脳裏にクッキリある。カッタイ氏のハートフルで完璧な通訳が一層心を弾ませ、和ませてくれた。（徳）

（デルケーヴィチャ女史の写真は1998年編集子撮影）



会員短信

CDのご案内

10月22日に【久元祐子巡礼の年第2年「イタリア」】をリリースさせていただきました。昨年の【ノスラリア】に続き、7枚目のCDです。私のホームページにライナーノートを掲載しましたのでご覧頂ければ光栄です。

<http://www.asahi-net.or.jp/~ch5yhsmt/pnete/cditalia-note.htm>

CDはヤマハ銀座店などの有名レコードショップに置いてくださっているようです。店頭係員にお問い合わせください。もしお目に止まりましたらお聴きいただければ光栄に存

じます。私宛にメールをくださいますともお送りさせていただきます。

久元祐子（理事・東京都新宿区）

mailto:pianoyuko@luna.email.ne.jp

.....

早稲田大学グリークラブ

12月5日（日）に新宿厚生年金会館大ホールで第52回定期演奏会を開いた。山田和樹指揮で「縄文」（荻久保和明作曲）のオーケストラ版を初演した他、樋本英一指揮で「五つのラメント～草野心平の詩による～」（廣瀬量平作曲）など、94名がオンステージして満員の聴衆を魅了した。

恒例の第53回送別演奏会は05年2月

27日（アミュール立川）

大学最多部員数を誇る伝統の男声合唱団で2007年に創立100年を迎える。2002年にリーガで演奏会を行い、数々のラトビア作品もレパートリーに持つ。2005年の活動予定は「<http://www.wasedaglee.com>」をご覧ください。

.....

お教えください

日韓文化交流基金理事長の職を退き、フリーの身になった機会に多少贅沢な旅をしようと、「クイーン・メリー号の地中海クルーズ」に出掛けました。Civitavechiaの海岸を歩いて

いて「日本聖殉教物協会」に出くわしました。私はそこで知ったことをホームページの「雑文採録欄」に書きましたら、ある方から「Civitavechia港に上陸した最所の日本人は天正遣欧少年使節団だった筈」とメールを頂いたのです。このあたりの事情に詳しい方がおられましたら、私のホームページをご覧いただいで是非お教えください。

熊谷直博（会長・東京都大田区）

ホームページ

<http://www2s.biglobe.ne.jp/~bjornd/>

Eメール bjom@n02.itscom.net

.....

21世紀、最も注目されている 《ラトヴィア音楽》

田摩 勇
(音楽番組ディレクター)



ラトヴィアという国名が、大きく日本の新聞紙上に載ったのはソヴィエト連邦から独立を勝ち取った1990年ではなかったでしょうか。それまで日本国内でラトヴィアについて、知っている人はごく一部の人だけでした。

しかし合唱界では、その素晴らしさを1900年代のはじめにはすでに欧州各国で知られており、独、仏、伊、英の有力紙などでも絶賛していました。ただ第二次世界大戦中から戦後にかけてその活動は控えめとなり、メジャーなコンクールでの優勝も見られなくなりました。

世界の目が再びラトヴィアに向けたのは1968年、ハンガリーでのバルトーク・コンクールで圧倒的な演奏をしたことです。この優勝でラトヴィア合唱界は再び世界の脚光を浴びることになり、対外活動が活発化します。日本との関係では1977年に神戸の合唱団が歌の祭典に参加したことや、ポニージャックスの二度にわたるリーガ公演などがあります。独立後最初にリーガで自主公演を開いた外国合唱団は稲門グリークラブで、以後アマチュアのコーラスグループがたびたび同国を訪れるなど、合唱を通じて草の根的な文化交流がはじまり、現在ではラトヴィアが優れた合唱国であることを多くの人達知ることとなりました。

一方クラシック音楽の世界では、

指揮者のマリス・ヤンソンス、ヴァイオリニストのゴドン・クレメル、チェリストのミーシャ・マイスキー、ソプラノのイネッサ・ガランテ、そして作曲家のペーテリス・ヴァスクスなど、ラトヴィア出身のアーティスト達が世界のクラシック・シーンで活躍し注目を集めています。今秋、



1998 ラトヴィア合唱祭

ヤンソンスが名門オーケストラ、ロイヤル・コンセルトヘボウを率いて来日し、絶賛を博したのは周知の通りです。

このような状況がどうして生まれたのかを、その背景をラトヴィアの音楽史を振り返りながら考えてみましょう。

中世以来ハンザ同盟に加わり、ロシアと西欧との中継貿易で大きな利益を得て栄えたリーガは、多くのドイツ人が移住し、ドイツ文化の栄えた町でした。1761年にオーケストラが結成され、1782年には歌劇場が設

立されました。そしてモーツァルトの歌劇「後宮からの逃走」、ベートーヴェンの歌劇「フィデリオ」、ウェーバーの歌劇「魔弾の射手」などが、作曲家の存命中に演じられたという大変音楽文化の高い町でもありました。

また作曲家リヒャルト・ワーグナーが、1837年から39年までこの劇場の楽長を務め、彼の出世作となった歌劇「リエンツィ」の第1幕と第2幕は、このリーガで作曲された作品です。ワーグナーは、この劇場を古く、小さくて、何か陰気な印象を与えるため「穀倉」と呼んでいたそうです。

しかしワーグナーは、この劇場の長所を、第1に客席が後方に向かって古代の円形劇場のように急傾斜に上がりかつ広がっていること、第2に上演中客席を暗くしていること、第3にオーケストラの席がかなり低く沈んでいることの3点を上げています。のちにこれらの特徴は、あのパイロイトの祭典劇場で再現することとなるのです。その後1898年から1900年には有名な指揮者ブルーノ・ワルターも楽長を務めています。

1795年にラトヴィアは、完全にロシア領になり、文化的に帝政ロシア

の締め付けが強化され、ロシア化が進められました。しかし経済的には相互依存が強まり、飛躍的な発展をもたらしました。リーガは、この地方におけるもっとも重要な産業の中心地であったのです。

また農奴制の廃止により、農民が自由に都会に出ることが許され、活気溢れるリーガに多くの人々が集まり、小ブルジョワと商人階級が急速に出現しました。

19世紀後半には、ますます帝政ロシアによる非ロシア人のロシア化政策が強化されると、ラトヴィアの知識階級を中心に危機意識とともに民族意識が高まり、ラトヴィア語による新聞の発行や自国文化の維持に注目が集まり、民謡の収集などが始まりました。

そして民族意識の高揚のため、1873年に第1回合唱祭が行われ、民謡を主題にした歌や合唱曲が高らかに歌われたのでした。その後5年に一度定期的に開催され、ラトヴィア人の作曲家により、数多く合唱曲が作られ、大国による苦しい支配の中で、祖国を歌い続けてきたのでした。

1990年に独立を果し、それまでほとんど西側に知られことのなかったラトヴィアの優れた合唱事情が世界に知れ渡ることになりました。

ラトヴィアが、このような独自の文化的なバックグラウンドを持ち、それを人間の絆と歌の力で大事に守り育ててきたからこそ、世界的な演奏家や作曲家が生まれてきたのも当然の結果であると思われます。

21世紀の世界音楽界にあってラトヴィアに大きな注目と期待が集まる由縁です。

(筆者は早稲田大学グリークラブOB)



会員短信

「グランフォニック」東京演奏会

(東西四大学OB合唱団東海)

05年5月29日(日)

中央区中央会館 13時開演(予)

※名古屋在住の早稲田・同志社・関学グリークラブ及び慶応ワグネルのOBで10年前に結成した男声合唱団。四大学OBが同じ大学卒業生のような一体感で仲良くレベル高い活動を続けている。東京演奏会は初。

三ツ松平(顧問・グランフォニック団長)

お立ち寄りください

ラトヴィアの雑貨を輸入販売している家具屋の「楽楽」です。これまでラトヴィアに6回ほど行ってはいますが、何度行ってもワクワクする楽しい町

で大好きです。来年(05年)6月に、年に一度のハンドクラフト・マーケットに合わせて、「楽楽」主催のツアーを企画しています。お店ではラトヴィア観光協会の協力も得てラトヴィア情報を発信していますので、どうぞお立ち寄りくださいませ。

岩崎朋子(楽楽・世田谷区等々力)

電話 03-5760-7020

ファクス 03-5760-8020

ケイコ・マクナマラ

「Xmasコンサート」

12月25日(土)19時開演

サントリー小ホール

入場料5000円

スウェーデン在住のジャズピアニスト・ヴォーカリスト。「北極星メダル」

授章記念コンサート。演奏活動と平行して福祉問題にも取り組んでいる。ケイコ・マクナマラ(ラトヴィア子供支援の会会長)

16人の男声合唱団

「ローガンDX」鎌倉演奏会

05年4月24日(日)14時

鎌倉生涯学習センター(鎌倉駅徒歩3分)

平均年齢60歳を遥かに超えた熟年合唱団。21世紀に歌い続けたい日本の歌の数々と古き良き時代の外国ポップスを、江藤純子のピアノと一体になったオリジナルアレンジで歌い続ける。毎年8月下旬に蓼科高原の渡邊暁雄メモリアルホールでコンサートを開催。編曲指揮は当協会広報

担当の徳田浩。お問い合わせは編集室へ。

「バルト三国合唱音楽選集」

指揮者・松原千振氏(常務理事)のご好意で、ビクターエンターテインメントから発売中のCD「バルト三国合唱音楽選集」(全7枚・ラトヴィアの部分は2枚・各2700円)の割引販売を予定しています。松原氏が海外出張のため詳細は帰国後になりますが、興味のある方は加藤晴生宛で連絡ください。注文受付ではありません。追って割引価格などをご連絡します。電話03-3568-7227
ファクス03-3568-7229



リーガの演奏会事情

黒沢 歩

人口約72万人のラトヴィアの首都リーガには、それほど大きくないけれどそれぞれ特色豊かな演奏会場がいくつかあり、9月後半から5月上旬までのシーズンには、毎晩のように国内外の演奏家による国内外の作品を聴くことができます。なかでも演奏会場の花形である国立オペラ座は別名「ホワイト・ハウス」とも呼ばれ、長期的な修復作業を経て1995年に新しい幕を開けました。花と緑に包まれた美しい



内装に、訪れる地元の人びとのドレスアップもひときわ映えます。

オペラでは「アイダ」、「エフゲーニィ・オネーギン」、「アルチーナ」、「ラ・ボエーム」、「ナブッコ」、「椿姫」など比較的伝統的な演出のなかで、地元の若手舞台監督カイリス氏による「魔笛」では、舞台上で洗濯機が回るような演出で観客の意表を突きます。元俳優でもあり本人自身のカリスマ性も強いオペラ支配人のアンドレイス・ジャガルス氏が監督した「デーモン」と「さまよえるオランダ人」は、線と光が印象的な演出で注目を集めています。今シーズン登場している「トスカ」では、背景を這うようなライトの演出とトスカの手袋の深紅が、脳裏に焼きつくほどの悲劇性を物語っていました。

バレエのほうでは、「ジゼル」や「白鳥の湖」の他に、ラトヴィアの

作品「鳥のオペラ」が特に子供たちを楽しませています。年末年始には好例の「くるみ割り人形」が目白押しとなり、チケットのインターネット予約 (www.opera.lv) でも、良い方の席は11月初旬にはもう売り切れとなっています。このオペラ座でバレエを観るなら、なんといっても「ロミオとジュリエット」でしょう。その斬新で張りのある舞台によって、「ラトヴィアのクラシック・バレエ」に私が持っていた凝り固まったイメージはすっかり融かされました。

オペラ座では、年末の三日間のガラコンサートも好例となっています。この夜、ここに集まる人びとの服装は、年始早々の週刊誌のページを飾っています。

そういえば、観るだけでなく自分を見せることも重要な要素なのがオ

ペラでした。

さて、11月も下旬の今夜は、シンシンと白雪積もる旧市街の大ギルドのホールまで、アメリカからやって来た定評高いTokyo String Quartetの演奏会に行こうと思っています。そうそう、冬用のブーツで歩いて行きますが、会場で履き替える靴を忘れないようにしなくては！

(2004年11月23日 リーガにて)

黒沢 歩さん

91年9月 モスクワ・プーシキン大学でロシア語研修
93年～97年 リーガ日本語学校教師
97年 ラトヴィア大学人文学部ラトヴィア文学科修士課程修了
98年～ ラトヴィア大学現代言語学部東洋学日本語講師
00年～ 在ラトヴィア日本大使館勤務
近著「木漏れ日のラトヴィア」(新評論社)



リガ室内合唱団 アヴェ・ソル

素晴らしい透明度、祖国愛と団結性に圧倒された

ラトヴィアを代表する合唱団の一つ、「リガ室内合唱団アヴェ・ソル」の東京演奏会(10月4日・東京文化会館大ホール)を聴き、如何にも北欧らしい透明度とその水準の高さに改めて感銘を受けました。プログラムは定石通り第1部は宗教曲を中心にした本格的な合唱曲、第2部は民族衣装で歌われたラトヴィア民謡を中心とした楽しいステージでした。盛り上がったのはやはり第2部で、伝統と民族の誇り、祖国愛といったものを感じました。

指揮はイマンツ・コカーシュと息子のウルディス・コカーシュ。1・コカーシュはラトヴィア音楽アカデミーの校長を歴任する同国の卓越した合唱指揮者。ラトヴィアの民間人に与えられる最高栄誉の三星勲章を授与されています。

以前ラトヴィアの合唱祭(エストニアも同じですが)に参加しました。まさに国をあげての行事で、各地でそれぞれの合唱団が一年近く練習して5年に1度、全国から数万の人が泊りがけで集まりますが、その全員合唱は実に感動的で民族としての団結力の強さに圧倒されました。国は小さく歴史的にも被压制国ながら、民族としてのアイデンティティを失わず、不死鳥の様に蘇った力の源泉を見た思いでした。我が日本民族も見習うべき所が多々ある様に思いました。

12月にはリガ大聖堂少年団が来日しますがこちらも楽しみです。(大澤寛之・早稲田大学グリークラブOB)

リガ室内合唱団アヴェ・ソル

1969年創設。ラトヴィアに古くから伝わる民謡もレパートリに持つ、高い能力と想像力を有する混声合唱団。世界各国にコンサートツアーを行い、各地のコンクールで優勝するなど実力を高く評価されている。

リガの中心街にあるベテロ・パウロ教会(320名収容のコンサートホールでもある)を拠点に活動中。

琥珀

誕生した「Latvija」にコラムを新設し、タイトルを「琥珀」とした。別名「太陽の石」、ラトヴィア人は必ず身に付けている、ラトヴィアの歴史を象徴するような重要な宝石。ラトヴィアへの思いや見聞を時々に記し続けたい▶これは明石在住の指揮者・嵯峨山まり子さんから当協会の加藤専務理事に届いたメールの一節。「11月3日、明石市民会館大ホールの音楽の集いに、魚住コーラス「わかくさ」が念願の「お母さん、頭を上げて」を演奏することができました。私たちに、世界中の人たちに平和と心の安いぎを願って歌うことができました。多くの方のお力を借りてこの作品を歌えたことを、本当に感謝いたしております」▶1992年、稲門グリークラブが、同国独立後初の外国合唱団としてリーガで演奏会を開いた。共演してくれた女声合唱団「ジントルス」がこの曲を歌った時、メンバーは何回もアンコールを求めた。心が洗われるような暖かいメロディの

頭の8小節をすぐ覚え、ホテルに帰ってからも殆どのメンバーが自然に口ずさんでいた。曲名も作曲者も分からないまま帰国し、ただ幻の「あの曲」として、初めて聞いたときの感銘を語り続けていた▶稲門グリーのラトヴィア演奏会を推進した加藤氏は、その後ラトヴィアを訪れる度に楽譜店に足を運んでこの作品を追い続けた。そして12年目に、やっとジントルス代表から楽譜を入手し、積年の恋人に巡り合った。原題「Pacel Galvu, Balta Mat!」。「百万本のバラ」でおなじみのライモンズ・パウルの作品である。「わかくさ」の初演に際し、さいたま在住の吉田ラマスさん(元ラトヴィア外務省外交官・当協会発起人の一人)が、MDで発音指導した背景もあった▶ラトヴィアには120万の伝承民謡があり、次々に生まれる新しい歌を加えると400万曲に及ぶという。日本人の心に通じる曲が圧倒的に多い。「Pacel Galvu, Balta Mat!」はその代表的な曲だ。会員各位と一緒に歌える機会があればと夢みている。(徳)

第1回総会兼懇親会のご案内

日本ラトヴィア音楽協会第1回総会兼懇親会を下記の通り開催いたします。改めて通知いたしますが、出来るだけ多くの会員にお集まりいただきますようお願いいたします。あらかじめスケジュール表にご記入の上、ご予約ください。

会長 熊谷直博

日時 2005年2月5日(土) 記
11時30分 理事会 12時30分 総会 13時 懇親会
場所 霞ヶ関三井クラブ

※同伴者大歓迎です。和気あいの懇親会を目指して、余興、福引なども考えています。賞品をご寄贈いただければ幸いです。ご連絡は加藤専務理事まで。

「バルトの民は歌の民」と言われます。ラトビアには伝承民謡の他に次々に生まれる新しい歌を加えると400万曲に及ぶ歌があり、これは同国人口の半分を占めるラトビア一人当たり3曲という信じられない数です。

1991年にロシアから独立を果たし、ラトビアの優れた合唱事情が世界に知れ渡りようになりました。合唱を通じた日本との交流も急速に深まっています。私たちは、ラトビアの人たちが、人生の喜び、悲しみ、祈り、怒りの全てを、素晴らしい音楽に写し続けた偉大な歴史の一端を知ることができました。

クラシック音楽の世界でも、多くの優れた作曲家や演奏家が輩出し、ラトビア人は、自分たちの音楽が偉大な文化財であることに大きな誇りを持っています。日本でも愛唱されている「百万本のバラ」が、当時の同国文化大臣の作品であることも驚きでした。

国と国の真の交流は、人と人との草の根交流が不可欠です。遠く離れた二つの国は、こよなく音楽を愛する人が多いことで共通しています。

2004年9月17日、各界の方々の賛同を得て「日本ラトビア音楽協会」が正式に発足しました。当面、演奏会、講演会、親睦会などを通してラトビア共和国との交流、支援を深め、同国の合唱関連情報を収集、公開する活動を目指しています。第一歩を踏み出したばかりで会員数はまだ70名ですが、大きな輪に広がることを期待しながら夢の実現に向かいたいと願っています。多くの方に加わっていただきますようご案内申し上げます。

(1) 事業目的

- 1、ラトビアの音楽関連情報収集及び公開



1998 深更のジンタルス野外パーティーで(指揮はデルケーヴィチャさん)

情報断片

〇…加藤晴生専務理事の熱意に打たれて当会発足に関与し、広報を担当することになりました。かつてラトビア合唱祭に参加したことがあり、ラトビアの音楽に明け暮れた日夜の感動が強く脳裏に焼きついています。各界で活躍される会員各位の積極参加で、密度の濃いニュースを作りたい

日本ラトビア音楽協会のご案内

- 2、協会ニュースLatvijaの定期発行
- 3、演奏会の開催、支援・交流
- 4、講演会、親睦会の開催 他

(2) 運営組織と財産

役員は3名以上20名以内の理事、2名以内の監事、若干名の顧問、特別顧問で構成、理事の中から会長1名、副会長3名以内、専務理事1名、常務理事10名以内で構成する。総会は正会員で構成し、定期総会は年1回、他に必要に応じて会長が臨時総会を招集することができる。

会員は正会員、賛助会員、名誉会員の3種類。

会の財産は、会費、寄付金品、財産から生じる収入、事業に伴う収入、その他の収入からなり、経費は財産で支弁する。

(3) 発起人の方々(アイウエオ順)

※理事・監事就任者の肩書きは右の一覧表を参照ください。

アイラ・ベルジャーニャ(リーガ・ドーム合唱団ほか指揮者・第23回歌の祭典実行委員兼指揮者)、アウマス・デルケーヴィツァ(ラトビア民族合唱祭名誉指揮者・国家最高功労者)、安斎真治(早稲田大学グリークラブOB会幹事)、石井洋一(早稲田大学グリークラブ会長)、稲山輝機(毎日新聞社専務取締役)、今澤哲郎(東京稲門グリークラブ幹事)、エドガルス・カッタイ(ラトビア日本協会会長)、遠藤守正、加藤登紀子(歌手)、加藤晴生、金岡隆(佐工サービス取締役)、神郡克彦(長崎大学教授)、菊地康則(日本ガールズ協会代表)、熊谷直博、黒沢歩(ラトビア語翻訳家・在ラトビア日本大使館)、黒沢幸男、小磯明(日本ラトビア協会理事長・桜美林学園常務理事)、小林晃(日本大学教授・日本貿易学協会会長)、小林信一(日本合唱協会常務理事)、小松原るな(歌手)、斎藤哲、桜井珊子(桜楓合唱団会長)、迫秀一

郎、島田精一(日本ユニシス社長)、清水信行(元三井物産常務取締役)、清水實(アイラス取締役)、ジャンネッタ・スードニツェ(パレックス銀行駐日代表)、白井克彦(早稲田大学総長)、杉浦保友、ダツェ・アダムソン(女声合唱団ジンタルス代表)、田中宏(指揮者・日本のうたを歌う会主宰)、筑紫哲也(ジャーナリスト)、坪井秀夫(大阪稲門グリークラブ会長)、徳田浩、富永侃(早稲田大学校友会兵庫支部副会長)、中井弘明(平成ビジネスアソシエーツ常務執行委員)、長澤護、永田宏(三井物産顧問)、西脇久夫、西原義弘(北海道東川ラトビア交流協会会長)、野村三郎(メロスインテュチュート代表・在ウィーン)、久本祐子、福井忠雄(福井自動車会長)、風呂本武敏(愛知学院大学教授・日本アイルランド文学協会前会長)、風呂本悖子(城西国際大学教授)、堀俊介、レディ・マークス寿子(作家・秀明大学教授)、前田二生(指揮者)、松原千振、三ツ松平(男声合唱団グランフォニック団長)、宮崎勝治(元朝日新聞ヨーロッパ総局長)、村山喜一郎(日本エストニア友好協会東京支部副支部長)、八木昌子(桜友女声合唱団責任者)、矢田立郎(神戸市長)、山根秀夫(神戸新聞会長)、山本徳行(スウェーデン名誉理事・ラトビア支援の会)、山元淑乃(ラトビア大学現代言語学東洋学科講師)、吉田ラスマ(元ラトビア共和国外交官)、東京六大学合唱連盟、東西四大学合唱連盟

(4) 入会お申し込み

- 【年会費】正会員 個人5,000円 法人1,0000円
- 賛助会員 5,000円 (個人・団体とも)

ご希望の方は、日本ラトビア音楽協会事務局(1面題字右に番号・アドレスを掲載)へ、ファクスかメールでご連絡ください。入会申込書と会費払い込み用紙をお送りいたします。



自由の記念碑

理事・監事

- | | | |
|--------------|--------|------------------------------------|
| 会 長 | 熊谷 直博 | 元 駐ラトビア日本国大使 |
| 副 会 長 | 藤井 威 | 前 駐スウェーデンラトビア大使 |
| | 岡村 喬生 | オペラ歌手 |
| 専務理事 | 加藤 晴生 | 平成ビジネスアソシエーツ常務執行役員 |
| 常務理事 | 斎藤 哲 | 日本経済新聞社 社友
前ロシア東欧記者会会長 |
| | 徳田 浩 | 柔道新聞編集長
元毎日新聞編集委員 |
| | 黒澤 幸男 | 作陽大学音楽学部教授 |
| | 遠藤 守正 | 税理士 |
| | 堀 俊輔 | 指揮者 |
| | 松原 千振 | 東京混声合唱団常任指揮者 |
| 理 事 | 迫 秀一郎 | サンルートプラザ東京 総支配人 |
| | 西脇 久夫 | ボニーージャックス
(株)ニュー西北エンタープライズ代表取締役 |
| | 長澤 護 | 指揮者 早稲田大学グリークラブOB会前会長 |
| | 杉浦 保友 | 一橋大学教授 |
| | 久元 裕子 | ピアニスト |
| 監 事 | 頼原 信二郎 | 早稲田大学グリークラブOB会 広報担当 |

と思います。早々に寄せられた皆様からの情報を整理しながら、素晴らしい会に発展する予感がしています。どうかよろしく願います。〇…国名は、外務省と新聞用語の日本語表示である「ラトビア」を基本的に使用します。会の正式名称を日本ラトビア音楽協会としました。ただ、会員各位には英語のLatvia(ラトヴィア)や、原語のLatvija(ラトビヤ)

にこだわる方が多いと思いますので、皆様の原稿・情報は原文のまま掲載します。題字の「Latvija」は音楽の国ラトビヤにこだわりました。〇…会の発展は何といっても会員数が増えることに尽きます。どうか積極的に新しい方のご入会を促進していただきますようお願い申し上げます。次号に会員名簿を掲載します。なお、何人かの方に顧問として会の

フォローをお願いしていますが、次号にご氏名を掲載します。(徳)



ラトビア美女に囲まれた編集子